

編者はしがき

本書「聖靈篇上」は、著者である谷口雅春先生の最初の講演旅行の巡錫紀行である。昭和九年一月十一日に当時の住まいがあった神戸・住吉を出発し、盛岡(十二、十三日)、東京(十四、十八日)、七尾(十九、二十日)を巡って二十一日に帰着した。本書は、盛岡と東京を巡る講演旅行記が収録されている。

本書には、「真理」の悟りによって「永遠に輝く」すばらしい信徒が数多、登場する。本書が、バイブルの「使徒行伝」になぞらえられる「現代の使徒行伝」と称えられるゆえんである。

その筆頭は何といっても服部仁郎氏である。本全集のカバーを飾る「ご神像」の制作者として知られる彫刻家である。この「ご神像」とは何か。谷口雅春先生はこのように述べられる。

「天使の言葉」(編者註・本書に収録されている)は、私が机に向っている時に突然浮んで来た思想が、一種の詩的なりズムを帯びて来たのを書き止めておいたのである。しかし私が霊感的に書いた詩のうちのあるものの校正刷を読んでいるとき、その説める者(私ではない)に神が懸り給うて、「生長の家」の神が天空高く詩中の『生命の長老』に相応しいような白き衣を足まで垂れ、白髯胸まで至る姿にて神姿を現わし給うた(二頁)

その具象化こそ、この「ご神像」に他ならない。この彫刻に、服部仁郎氏がどれほどの精魂を傾注せられたか。夫人の一枝さんはこう語っている。

「服部一門の永遠の喜びは、生長の家本部会館と円塔(編者註・光明の塔)に建立された大神像の作成です。夫は毎日神想観、聖經読誦、身心を浄め製作に精進し、昭和二十八年完成しました。不滅の靈光燦然と全世界に輝かしています」(『理想世界』誌

昭和四十七年四月号)

ところで、服部仁郎氏がいかにして生長の家に入信したのか。本書には、「服部仁郎氏の肺炎三日で治る」と題して次のように記されている。

「宇部の三隅さんが来ていられた時には、ちょうど彫刻家の服部仁郎氏が来ておられました、同氏が前月二十七日には肺炎で瀕死の状態であったのが、片岡環氏に貰った『生長の家』の本二冊と、同氏に筆写してもらった神想観の歌四首とで『神の子、無病』の悟りを開き、瀕死の三日後には起上って制作半途の彫刻の仕上げにかかり、四日目にたずねて来た医者が服部氏を診察してみても、『もう病気はない』と宣言したのさえ不思議でありましたが、その翌日見舞いに訪ねて来られた近隣の桑垣さんの奥さんのリユーマチスで動かない手が、却って服部氏の『神の子、無病』の自覚の話を聞かされると同時に動き出したというような不思議さえ話されました」(三七〜三八頁)

服部氏は、このように自らの病を克服したばかりではなく、数多くの方の病をも癒した。その奇蹟的治癒を目の当たりにした信徒たちの間から、いつしか氏は「薬師如来の

再来」とまで評されるに至った。なぜ、このような奇蹟が生まれるのか。谷口雅春先生は本書で次のように述べる。

「各人にはすべて『治す聖霊』が宿っています、それを完全に認めて信ずる程度に従って、その『治す聖霊』の働く程度が異うであります。手のひらを信じたら、手のひらを信じた程度に『治す聖霊』が働くのであります……しかし神を信じたら『治す聖霊』の受け方が一層甚だしいのであります」(五一頁)

その他にも、奇蹟的体験が陸続として生まれる。盛岡の工藤てつさん、佐藤勝身氏、東京の立仙淳三氏夫妻、山根八春氏、伊東種氏等の奇蹟が紹介され、肺炎、喘息、指の不随、腰の屈み、リユーマチス、胃癒、脱臼、尋麻疹、蓄膿症、神経衰弱、顔面神経痛、糖尿病等が瞬く間に治癒している体験が紹介されている。そして「癒やされた者」が他の人々を癒やしているのである。まさに「治す聖霊」のしからしむるところであると云わざるを得ない。

谷口雅春先生は盛岡、東京で可能な限り講演をされる。人々は谷口雅春先生の奇蹟の教えを直に聴聞し、その聲咳に接し、個人指導を受ける。本書を繕けば当時の燃え盛る真理の勢いがいかにすさまじいものであったか、まさまざと実感されるに相違ない。

ところで、真理を聴聞することの意義について、谷口雅春先生は次のように指摘される。

「東京富士小学校での講演座談後、皆が集って神想観を実修している時に、天空から招神歌の合唱する声が増えて来たのを、神想観実修中の参会者が一人ならず数名も同時に聞いたことでありました。釈迦が説法する時には常に現実界の人間だけではなく諸々の天人……等々の靈界棲息者がその説教を聴聞に来て、集るもの数方に達したというようなことが経文にも書いてありますが、知らぬ人は、そんなことは釈迦の大法螺だと思われるであります。真理の講話のあるところそこには必ず靈界の人間、天人その他が集って来てその講話を聴聞するというようになっているのであります。生長

の家講演会の日、靈界でも現実界に於けると同様神想観を実修していたに相違ないものであります。靈界でも招神歌を歌っていたのを吾々数名が靈耳にそれを聞くことが出来たのであります」(一四一〜一四二頁)

もとより、今となつては谷口雅春先生の講演を聴聞することは出来得ない。しかし、本書を繕けば、そこに居ながらにして谷口雅春先生の尊い説法を聞くことはできるのである。常に座右の書として新編「生命の真相」を手元におき、いつでもどこでも谷口雅春先生の説法に触れ、人生の道先案内として大いに活用していただければ、編者としてこれにすぐる欲ひはない。

平成二十六年一月吉日

谷口雅春著作編纂委員会